

室伏鴻著／中原蒼二，鈴木創士，渡辺喜美子編 『室伏鴻集成』

國吉和子

本書は2015年に急逝した舞踏家、室伏鴻の遺稿集である。室伏は1970年代初頭磨赤兒らとともに、舞踏集団大駱駝艦の旗揚げに参加、独立後は男性舞踏カンパニー「背火」を結成、さらに活躍の場を海外へ広げた。まさに舞踏の興隆展開期を生きた舞踏家の一人である。特に、1978年のパリ公演は、その後続く日本の舞踏の海外進出として先鞭をつけた公演となった。亡くなった年も南米でのワークショップを終え、ヨーロッパ公演へ向かう途中、メキシコシティーにて客死、まさに旅の途上であった。

無類の読書家であった室伏はまた、多くの言葉を遺していた。それらは室伏の思考の軌跡として、未発表のものも含めて、テキストやメモ、日記の形で自室に発見されたという。遺稿集の編集は次の三人が担当した。中原蒼二は演劇・舞踏のプロデューサーであり、編集者として1970年代舞踏の初期から室伏を良く知る人物である。また、フランス文学者の鈴木創士はA.アルトーやJ.ジュネの研究、翻訳者でもあり、古くから舞踏の良き理解者である。そして渡辺喜美子は室伏のマネージャーであり、彼の死後は遺品整理とそのアーカイブ構築に奔走した。彼等を中心として多くの協力者によって室伏の舞踏、彼の身体をめぐる思考の跡が広く紹介されることとなった。

420頁を超える本文は、1970年代から2010年代までが10年毎に区切られ、それぞれの時期に書かれたもの（と思われるものも含めて）を年代順に構成している。最晩年の2014、2015年は別立てとして、日記に記された言葉から抜粋掲載し、死の2週間前に書かれた文章が絶筆となった。さらに巻末には2本のインタビュー（内1本は未発表のもの）と丁寧な改題が付されている。

室伏の文章は時に詩句のように響き、また果敢な маниフェストであり、ある時は厳しく問いかけてくる。言葉による思考と舞踏の実践を密接に伴走させながら、室伏は未曾有の身体を作りあげたといえるだろう。その様子はまるで金属を精錬するように激しくも執拗な営為であった。

室伏が舞踏の世界に入る切っ掛けとなった舞台が、暗黒舞踏の土方巽の舞台（通称「肉体の叛乱」とよばれる1968年の作品）であった。この舞台は22歳の室伏を直撃し、この衝撃は終生にわたり彼の舞踏の軸を形成することとなった。彼はさらに、

かねてから関心のあった修験道、山伏の修行を出羽三山に入り実際に体験した後、東京に戻り舞踏家としての活動を始めている。

初期の10年間の文章は他の時期に比べると、さすがに数は少ないものの、出色の宣言文が残っている。「鎖金令」（1975年）と「常闇形（ひながた）」（1977年）である。前者は、室伏が舞台活動と並行して編集主幹したタブロイド判の舞踏新聞『激しい季節』に掲載された文章、後者は舞踏派背火結成公演を福井県五太子町で行った際に作られたパンフレットからの文である。舞踏家になって間もない室伏の決意がうかがえるマニフェストである。

「断面に動かしがたい必然として残酷、滑稽に灼き付いた痙攣が舞踏の祖である。命の祖形がある」（p.23）

1976年から一時期移り住んだ福井の地で、室伏は肉体を裏日本の厳しい自然の中に置き、身を削ぐようにして舞踏の意味を模索していた。これら二つのマニフェストにはすでに、後年繰り返し語られる「断面」、痙攣、「裂傷」といった言葉が早くも現れており、日常的な肉体から舞踏する身体へと移るための挑発的な言葉となっている。加えて、この時期には特に「異形性」が強調されているが、これは「木乃伊（ミイラ）」という室伏の舞踏で提示される現われと重なり、土方巽の「命がけで突立った死体」に対応するかのようである。さらに「常闇」は、土方の「暗黒」との関連を想起させる。こうした言葉や文体の類似は、室伏が自分の舞踏を形成するために、強く意識していたのが土方の暗黒舞踏であり、彼の言葉であったことを暗示している。

さて、1978年のパリ公演に続き1980年代に入ると、室伏は女性のグループ、アリアドーネの会（カルロッタ池田主宰）を振り付けるとともに、キャバレーでの金粉ショーを続けるも、積極的にヨーロッパ公演に出かけるようになる。にわかには機会の増えた海外公演を通して、室伏は「移動」という感覚を強く意識するようになった。その頃の文章には、踊りとは、「天国と地獄の境目の勾配にあって、どっちにもつかぬ途中の徘徊である」とか、「行き先定まらぬ、移動ということだけが確かなようである」（p.97）など、「旅」、「距離」、「境界」といった言葉が頻出する。生涯一歩も国外へ

出ようともしなかった土方に対して、室伏は「移動」こそ、来るべき身体の生成には不可欠の要素としたのである。

1986年に土方が死去、生涯の師を失った室伏は、「外の舞踏」宣言を書いた。

謹んで<舞踏の祖>という冠名を戴いた彼の晩年の不本意に、哀悼の意を表したい。それと同時に、彼が<土方巽>の名に於て、あるいは<暗黒舞踏>の名に於て、語りつがれてゆくことの<外>で、その固有名詞によって代名されえなかったものにこだわること。…(略)…ゆえに、外にこだわることは、その無名、今だ名をもたないものの生成の、その刹那にこだわるということなのだ。(p.69)

土方自身、「肉体の叛乱」で既存の構造から外へ出ること、「それる」ことを自身の肉体に宣告したのではなかったのか、だから自分は<外>に殉ずることによって、<外>を伝承するのだと。室伏はこのように宣言することによって、土方から一気に離れ、自身の表現を開拓しようとしている。土方からの訣別が「舞踏の外へ」という宣言となったのである。

また、海外公演を続ける過程で、舞踏が日本的なるものとして受け止められることにも、室伏はあからさまな嫌悪感を示している。自らのアイデンティティを問いかげられることによって、「日本人であるからだのオリジンがどれほど虚構であったか」を痛感し、同時にだからこそ一層「からだの最も深く、遠くにある力で立ち上がらせること」の必要を説くのであった。

そして改めて「流れ」「移動」「漂着」という、からだを絶え間なく移す行為に、「あらゆる命名の、その外」に身体を生成させようと確信していったと思われる。踊ることは流れる時間の中に一瞬の惑乱(躓き)が生じるに等しい。形象を常に生成しつづける流れである限り、「私」は移動そのものであると同時に、ちょうど瀧を切断するほどのダイナミズムと瞬時に、室伏は舞踏以後の身体の現われを見ていたのだ。

1990年代に入ると、室伏の活動範囲に南米が加わり、そのほとんどを海外公演に費やされた時期となる。室伏はパートナーとのデュエットや、自身のソロ作品といった身軽な規模で回っている。国境を越え、まさに空間的、地理的に脱走を続ける室伏にとって、いよいよ「縁(コチ)」、ボーダーを超えて移動する感覚が活動の軸となっていった。そして「私の舞踏への関わりは、はじめから<外>と<放浪>」がテーマであり、境界(edge)に立つこと、つまり越境のプロセスそのものとなること、そして「われわれのカタチとは『はかないもの』だ。刻々と、死へと引き渡される力のひとつの経路、経脈でしかない」と断言した。室伏

が自身の肉体を銀色に塗り、硬質な金属のような形象となって踊るquick silverは、一瞬「仮止め」された肉体であり、脆さと揮発性をも同時に体現した姿であった。

また、室伏は踊りの技術についてもほとんど土方と同様の考え方をもっていた。舞踏は技術的な修練によって獲得されるものではない、技術が生まれる沃野に立つことが大切なのだ、と土方は言った。室伏もまた、舞踏は技術の習得で可能になるものではない、舞踏に方法というものがあるとすれば、「思いがけない事件として更新されつづけるエフェメラルな方法」であるという。危機の、戦闘的な磁場として生成させること、こうして形象に頼ることなく、流れそのものとなるのが大切であるといったのである。

室伏は、土方の「舞踏ノート」が彼の没後、弟子たちによって公開されてから、土方の暗黒舞踏は「マイム舞踏」となって、形ばかりが模倣されるようになってしまったのだと批判する。室伏の中で土方はあくまでも1960年代の土方であり、舞踏は本来、出来事(事件)として立ち上がってくるものでなければいけない、といている。

死体と肉体、きっとそれは同じもの事だという直観は、自分の体験に照らしてみれば誰にも届くことであろう。それは必ず「恐怖」に裏打ちされた体験とあってよい。いや、「体験」がそもそも恐怖の、失語の体験であり、そこに舞踏の「原基」はあるであろう。(p.244)

限界を超え境界の体験を通して初めて、舞踏は成立する、それは「恐怖に裏打ちされた体験」であり、それこそが原基——ある器官になるべく決定された未分化の段階にある細胞、あるいは初期構造——である。恐怖は「私」という自明性の崩壊が齎したものの、名前のないダンスを踊る自分のダンスを「もはやダンスでさえないものを踊りたいのだ」と言った室伏。まさに、彼は舞踏でもなく、もはやダンスでもなく、その両者を突き抜けて、いわば多義的パフォーマンスの領域へと、舞踏を解放したのではないだろうか。

2000年頃から室伏の公演活動にワークショップが同時に開かれるようになった。これは70年代80年代の舞踏を知らない若い世代に、どのように室伏が彼の目指す領域を伝えることができるかという大きな課題であった。彼がワークショップで若者と共有できる課題として選んだのがニジンスキーであった。ニーチェ、ブランショ、ドゥルーズ等々を読破し、さらに分かり易い言葉を選びながら、若者を指導していた室伏。土方没後の舞踏をはるかに見据えていた室伏が遺した言葉は、現在もさまざまに模索を続ける身体に、強烈な指針を示しているように思われる。

(河出書房新社、2018年1月刊行)